



組を行なっている。

86名は有害鳥獣駆除員として、わな猟専属員59名、銃猟のみ14名、銃・わな13名で構成され駆除活動に当たっている。

\*駆除員の高齢化が今後の課題とも捉えている。(平均年齢64.6歳 80代3名、70代26名……40代10名、30代1名など)

#### ④補助状況、補助事業

・箱わなの補助金として、大10,000円/基、小4,000円/基、(くくりわな2,000円/基)。

・報奨金は国の支援金の他町支援金として

サル、シカ (成獣 町7,000円 国8,000円)

イノシシ (成獣 町5,000円 国8,000円) など

・国、県の鳥獣被害防止総合対策交付金を活用し、箱わなスマートセンサー、GPS マーカー、センサーカメラ、デジタル簡易無線、搬出用ウインチなど支援。

・国、県、町の補助事業として電気柵281か所 約111km、金網柵等19か所 約10km設置。

#### ⑤ 捕獲頭数 (28年度)

・イノシシ 842頭 サル 115頭 シカ 254頭など

#### ⑥ 捕獲個体の処理状況

・山間部にコルゲート管を埋設(径100cm 長さ300cm程)し、埋設処理の省力化、掘り起こしの防止をしている。又、わな捕獲時にはバッテリー利用で瞬時に苦しみ無く処理するアイテムを導入し、これは良質の肉の確保にも繋がっている。(富士見町でも参考に出来るかも)

・処理施設は財源問題で未整備で有り、販売網の確保が困難なことと合わせ、商品化は小規模に留まる。地元イベントなどではバーベキューなどで消費する事も多々有り、食用としては放射線の全頭検査を実施している。

#### ⑦ その他

・町にとって百害であるものを、観光資源としての活用を実施し始める。

※逆転の発想で地域の活性化に向けた好循環の創出に取り組んでいる。

○けもの道トレッキング (定員30名に対し 200名ほどの申し込み)

里山保全の為の有害鳥獣対策への取組、狩猟生活、生態、被害対策、わな猟の現場を学ぶ。

○解体ワークショップ (定員20名に対し 113名の申し込み)

猟師の解体技術のレクチャーと解体実習を通して命を食べる大切さを学ぶ。

他、ジビエ料理ワークショップ、被害対策ワークショップなどの企画有り。

・これらの参加者は女性が多く、子供も少ない状況との事。

以上